

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04819

研究課題名(和文)聴覚障害学生の英語学習支援：英語力に応じた英語字幕呈示方法と補助教材の開発

研究課題名(英文) Support for Deaf and Hearing-Impaired Students in EFL Learning: Development of English Captioning Methods and Complementary Learning Materials Adjustable to Developmental Stages of English Learning

研究代表者

上原 景子 (UEHARA, KEIKO)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：40323323

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：今日の英語教育ではコミュニケーション能力の育成を目標に、英語を聞き話す活動が中心である。本研究では、聴覚障害学生の学習支援方法向上のため、英語の発達段階に応じた英語字幕呈示方法と補助教材を開発した。教材の開発では、聾者間で広く使われているアメリカ手話を用い「クラスルーム・イングリッシュ」の動画と冊子を制作した。「クラスルーム・イングリッシュ」は英語の授業で日常的に使う基本的な表現である。開発した教材は、学習者と教師が共に使いながら学べる「表現と活用可能な語彙集」で、英語の発達段階に応じたり日常生活にも活用できたりし、英語学習向上への充実した補助になることが期待できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の主な学術的意義は、英語圏の聾者がコミュニケーションの手段として使うアメリカ手話を用いて、教室英語の基本表現と語彙集の教材を開発したことである。また、主な社会的意義は、初期段階から「聞く・話す」が中心の英語学習における聴覚障害学生の支援に、コミュニケーションの手段としてのアメリカ手話の学習教材を導入したこと、英語学習への橋渡しや日常生活への応用への可能性を拓いたことである。また、開発した教材が英語の学習段階や発達段階に応じて柔軟に活用できることも意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This research produced methods of support for deaf/hearing-impaired students in EFL learning by (a) developing English captioning methods, and (b) creating complementary learning materials. Recent EFL education in Japan aims to develop learners' communication ability and uses much spoken English in lessons. To compensate for insufficiency of traditional support in such situations, we created a film and booklet that features 627 ASL (American Sign Language) expressions. Deaf/hearing-impaired students need to learn English expressions they can use practically for global communication. Although ASL has linguistic features different from those of Manually-Coded English, they share the majority of vocabulary. Thus, we employed ASL as an effective medium for deaf/hearing-impaired students to develop communication ability and created a set of ASL Classroom expressions. The materials can be shared by the teacher and students and used flexibly according to students' EFL developmental stages.

研究分野：英語科教育法 言語学 第二言語習得理論

キーワード：聴覚障害学生支援 英語教育 英語字幕呈示 アメリカ手話 クラスルーム・イングリッシュ 英語対  
応手話

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初は、英語によるコミュニケーションの能力を小・中・高を一貫して育成することを到達目標とした「グローバル化に対応した新たな英語教育改革」が始まっていた。この改革は急速なグローバル化への対応を目的に、英語教育全体の抜本的な充実を図るため、初等教育の拡充強化と中等教育高度化を目指していた。そのため、小学校では英語に慣れ親しませ、英語を用いたコミュニケーションへの興味関心を育むため、発達段階への考慮から音声中心の学習活動が行われ、中学・高校でも英語を使って英語の授業を行うことが・基本・原則とされるようになった。外国語環境下で音声英語を多量に用いることは、聞こえる学習者にとっては英語に多く触れ、使いながら学習できる望ましい方法である。しかし、聴覚障害児には学習の場で得られるべき情報が一層大きく制限されることは明白である。英語の音声を英語学習の初期段階から全て難しい英語の文字で示すことは不適切な支援であり、絵や写真などの視覚的な資料を増やすことは支援の方法として不十分である。新しい英語教育では学習活動自体を「英語を用いたコミュニケーションの場面」とし、小学校の英語音声主体の学習を受けて中学・高校の英語学習が行われる。こうした状況から、聴覚障害がある学習者の英語学習促進のためには、英語のコミュニケーション能力を身に付けるために有効な支援方法と英語の発達段階に即した補助教材の開発が急務であると考えられた。

### 2. 研究の目的

本研究の主な目的は、聴覚障害学生の英語学習支援に広く活用できる「英語の能力差に応じた英語字幕呈示方法と補助教材」を実践的に開発することである。今日の英語教育は、コミュニケーション能力育成を目標とするため音声中心で、中学・高校では「英語で英語の授業を行う」ことが、それぞれ基本・原則とされている。英語学習は聴者でも能力差が大きく、レベル対応の学習支援が重視されている。しかし、聴覚障害学生には、英語の音声が多量に授業で用いられる中、有効な支援が十分であるとは全く言えない。そこで、本研究は、これまでの我々の研究成果が示す聴覚障害者の英語字幕の読みの特性を背景に、聴覚障害がある学習者の英語学習の実態を探りつつ、英語の字幕呈示方法の検討と実践に活用できる補助教材の開発を通して、立ち遅れている聴覚障害学生の英語学習促進の支援に貢献することとした。

### 3. 研究の方法

本研究では、主に以下を行った。英語教育の動向と学校現場での英語教育の状況把握、英語字幕呈示方法の検討、コミュニケーションの手段としての英語とアメリカ手話に関する考察、アメリカ手話を用いたクラスルーム・イングリッシュの教材(動画と冊子)の作成

については、研究期間に「グローバル化に対応した新たな英語教育改革」と学習指導要領の改訂が進行していたため、新しい英語教育の方向性と学校現場における英語教育の状況を把握していくことが求められた。英語教育の方向性については、主として群馬県教育委員会の文部科学省英語教育強化拠点事業等への連携参与や県外各地における小・中・高の英語教育への指導助言の機会を通して、また学校現場における英語教育の状況については、公立一般小・中・高と聾学校での授業観察を多く行うことで把握した。

字幕呈示方法の改善については、これまでの研究での課題の検討を中心とした(上原, 他 2018)。テクノロジーの発展に伴いより多くのアプリケーションや機器の使用が可能となったが、英語の授業では英語と日本語の双方が使用されるため、誤認識の問題が依然として残っている。

コミュニケーションの手段としての英語とアメリカ手話の考察については、アメリカ手話を聴覚障害学生が英語を「聞くこと」「話すこと」の代替えとし、コミュニケーションの手段として導入することの可能性を探った(上原, 他 2018; 浦田, 他 2019)。この研究には、日本語、日本手話、英語、アメリカ手話の4言語の統語構造の比較分析や日本人聴覚障害者のアメリカ手話習得体験からの情報の考察などが含まれる。

クラスルーム・イングリッシュの教材作成については、研究成果から、アメリカ手話をコミュニケーションの手段として授業で使用するための表現集を開発し、動画と冊子を制作した。これらは、聴覚障害がある日本人学習者が教師と共に授業をコミュニケーションの場とし、英語の発達段階に応じて使っていける補助教材である。動画の字幕はアメリカ手話と英語の2言語で呈示し、両言語を比較しながら学習できるようにした。また、それぞれの表現の英語の綴り、統語構造、意味に焦点化した学習も行えるように、動画に対応した冊子では日本語の意味も加えた。開発・作成した教材は、学習者の英語力の発達段階に柔軟に適応できるものとするため、アメリカ手話の構造の基礎を学ぶパート、表現の学習のパート、学習する表現の数を拡大したり応用したりするための語彙増強のパート、英語学習への橋渡しとしての英語対応手話との比較のパートの4つで構成した。開発・制作にあたっては、英語の授業における様々な学習活動の場面を想定し、それぞれで用いられる典型的なクラスルーム・イングリッシュと語彙を多数挙げ、それらに聴覚障害がある学習者の英語学習で特有と思われる表現を加えた。こうしてできたサンプルを精選した結果、最終的に77項目627表現を使用することとし、動画1時間13分54秒、冊子A4版で50頁の教材の完成に至った。動画はスタジオで冊子原稿と対応させながら撮影し、完成までに数回の改訂を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 英語字幕の活用について

聴覚障害学生への日本語使用環境における学習支援は様々な取組が行われてきたが、英語学習における支援は立ち遅れている。過去によく見られた文法訳読式の英語学習では、「与えられたものを読んだり書いたりすること」に焦点が置かれ「話すこと」はほとんど重点が当てられなかったため、「聞くこと」は読むことで代替えし、資料を増やすなどの方法で支援が行われてきた。近年、日本語使用の環境下であれば、「聞くこと」の代わりとして字幕を読み、「話すこと」の代わりとしてタイプすることが授業を受ける際には一般的となった。本研究では Dragon Speech や UD トークなどを用いて英語使用の環境での実験を行ってきたが、いずれも、時には日本語と英語が同じくらいの量で使われたり、英語が基本であっても日本語の固有名詞やその他の表現も途中で使われたりするため、誤変換の課題は解決が非常に難しい。我々が行った音声字幕同時システムを用いた英語の実験では、英語に堪能な入力者2名と英語母語話者の修正者が行うことで誤変換の大半を防ぐことができたが、この方法を実践することには継続した人材確保が必要である。また、「話すこと」の代わりとして学習者がタイプすることには英語力の観点から限界があると言える。これらの課題には引き続き検討が必要である。

##### (2) 新しい英語教育の方向性と学校現場における英語教育の状況

「グローバル化に対応した英語教育改革」が行われ、日本人英語学習者は発信力が非常に弱く、既習の言語材料が実際のコミュニケーションの中で使えないという課題への対応が強調された。そのため、これまでの4技能4領域の「話すこと」が「やり取り」（双方向）と「発表」（一方向）の2領域に分けられ、4技能5領域として特に双方向の「やり取り」に力点が置かれるようになった。その結果として、一般の小・中・高の授業では、この新しい英語教育の方向性に従うべく、教師が英語で授業を行うだけでなく、音声媒体の英語を多用したコミュニケーションの言語活動が多く行われている。一方、聾学校の英語の授業では、日本語の文字・日本手話・日本手話の指文字が多く用いられ、学習者同士が英語で対話する場面はほとんど見られない傾向がある。本研究では、行った授業観察から、聴者が英語に多く触れ英語を互いに使いながら学んでいく一方で、聴覚障害がある学習者はそうした機会が与えられていない傾向があることが分かった。

また、英語独自の動詞の活用形や名詞の単数・複数とそれに伴う動詞との一致などの習得は、聴者にとっても容易でないが、聴覚障害児には一層習得が難しいことも見受けられた。こうしたことへの支援方法の一つとして、ごく基本的な英語表現を手話を介して学んでいくことが考えられる。例えば、本研究での取組のように、授業で日常的に繰り返して使うクラスルーム・イングリッシュをアメリカ手話で学び、その字幕と英語の字幕を対比的に見せていくなどが挙げられる。

##### (3) 聴覚障害学生の英語隔週へのアメリカ手話導入の可能性と課題

アメリカ手話は北米を中心として世界で用いられている外国手話で、聾者間のコミュニケーションに広く用いられている。これまで述べた状況から、本研究では、聴覚障害学生のグローバルコミュニケーションの手段として、アメリカ手話を授業に導入する可能性を、留学でのアメリカ手話習得経験者の体験談を分析したり、言語学的見地から分析したりして考察した（上原，他 2018；浦田，他 2019）。

聴覚障害がある日本人の英語学習にアメリカ手話を導入する場合の利点は、学習者がコミュニケーションの手段となる言語に触れ、使いながら習得していく道を拓けることである。しかし、課題としては、大きく2点が考えられる。まず、聴覚障害がある日本人の学習者は、多い場合には4言語（日本手話・日本語・アメリカ手話・英語）を習得することになる。アメリカ手話は、英語の統語構造とほぼ同じ構造の英語対応手話とは異なり、独自の統語構造をもつため、聾者が聴者とコミュニケーションを図る際には英語対応手話が用いられている。アメリカ手話と英語対応手話は語彙が共通であることから、北米では聴覚障害がある子どもたちが英語の読み書きを習得する際、アメリカ手話では使わない英語の語尾変化に対応するマーカーなどを教えていく方法がとられている。この方法を辿るとしても、4言語の習得が可能かどうかの問題がある。もう一つの課題は、日本人英語教師の大半はアメリカ手話を習得していないため、教える人材をどう確保するかである。

これらの課題への対応として、アメリカ手話の日本人習得者の体験談を分析したところ、アメリカ手話習得の有用性だけでなく、4言語の習得は、継続的に手話に触れ使いながら習得すれば可能であることが分かった。また、日本人英語教師がアメリカ手話を習得していない課題は、学習者と教材を共有して使いながら学んでいくことで、ある程度対応できるのでないかという考えに至った。その一つの方法として、日常的に繰り返して使うクラスルーム・イングリッシュの表現をアメリカ手話で学ぶことが考えられた（上原，他 2017；浦田，他 2019）。以上から、本研究では、教師と学習者が共に使いながら学べる「アメリカ手話を用いたクラスルーム・イングリッシュ」の教材を、英語の発達段階に応じて柔軟に活用できるような内容にして開発し、動画と冊子のセットで制作することにした。

(4)教師と学習者が共に学べる教材：アメリカ手話で学ぶ「クラスルーム・イングリッシュ」  
 クラスルーム・イングリッシュ（教室英語）は、英語の授業を英語で行う際に教師が用いる指示や簡単な説明等を中心とした英語表現である。英語で英語の授業全体を行う新しい英語教育では、クラスルーム・イングリッシュの種類は多様化すると同時に、授業内容との区別も薄れてきていると言える。外国語環境の英語学習では、仮の場面や状況を設定して活動を行うことが宿命であるが、クラスルーム・イングリッシュはある意味で真の場面での英語使用ということもできる。また、クラスルーム・イングリッシュは繰り返して継続的に使ったり、部分的な変換をして日常的に用いたりすることから容易に習得することができる。以上から、本研究ではアメリカ手話を用いたクラスルーム・イングリッシュの基本表現集を動画とそれに対応する冊子のセットで作成した。この表現集は、文構造などを選択したり、語彙の変換や増減をしたりして英語の学習段階や発達段階に対応することができ、また日常生活にも活用することができる。これらを背景に、本研究では、基本的な学習と応用的な学習の双方を考慮し、教材の内容を以下のように構成した。

- Part 1：アメリカ手話の基本事項 14 項目 133 の例示  
 7つの手の形、手話をする領域・手の動き、顔の表情、基本的な文法事項、数、指文字（アルファベット）など
- Part 2：アメリカ手話での「クラスルーム・イングリッシュ」 23 項目 210 表現  
 挨拶、活動やモデルの宣言、基本的な動作の指示、回数の表現、場所・方向の表現 褒める・励ます表現、相づち、確認の表現、など 一部対話形式も含む
- Part 3 アメリカ手話で使える基本語彙 26 項目 241 表現  
 Part 1 と Part 2 で学んだ表現の語彙をここにある語彙と部分的に変えることで、自分の考えや状況に合わせてアメリカ手話で意思疎通ができる仕組みとなっている。よく使う動詞・助動詞、形容詞、副詞、接続詞、時間・日・月・季節、天気、家族、場所・施設、文房具、食べ物・飲み物、乗り物、スポーツ・趣味、動物・植物、色、教科、国名など
- Part 4 「アメリカ手話」と「英語対应手話」 14 項目 40 表現  
 アメリカ手話(American Sign Language, ASL)と英語対应手話(Manually Coded English, MCE)の違いとそれぞれの役割についての説明

作成した動画では、アメリカ手話の字幕を大文字とスラッシュで表し、それに対応する英語表現を通常の書き方で添えている。こうすることで、授業で日常的に繰り返して使うクラスルーム・イングリッシュを、アメリカ手話の動きから目で学び、その字幕と英語の字幕を対比的に見ながらその相違点をつかみ、英語学習につなぐことができる。また、冊子では、表1のように対応する日本語の意味も載せている。

表1. 冊子『アメリカ手話で学ぶ「クラスルーム・イングリッシュ」の基礎』の表記例

番号	ASL	英語表現	日本語
1	A: HELLO / HOW YOU	A: Hello. How are you?	こんにちは。調子はどう？
	B: FINE / THANK-YOU	B: I'm fine. Thank you.	元気です。ありがとう。

教材の Part 4 では、アメリカ手話が英語と異なる文法構造をもつ手話言語であることから、英語学習との関連付けのため、英語対应手話との相違点と英語学習のヒントについて、以下のような解説を加えている。英語対应手話は、英語の文構造にほぼ沿った手話言語である。聴覚障害者同士が会話するときは通常アメリカ手話を使うが、健聴者と話すときには英語対应手話を使う(e.g. Lawrence 1999)。また、英語対应手話は聴覚障害児が英語を学ぶ際に使うという大切な役割も担っている。英語対应手話の語彙はアメリカ手話とほぼ同じであるが、アメリカ手話が独自の文法をもつのに対し、英語対应手話は単語を英語の文構造通りに並べ、英文法に特有の語尾変化などをサイン・マーカー(sign markers)を加えて表す(Flodin 2007: 50)。英語対应手話は Manually Coded Englishes と複数形で呼ばれることもあるように、いくつかの種類があり、中には、時制、動詞の語尾変化、名詞の単数・複数、冠詞、前置詞などほとんど全ての英語の文法規則を反映するものもあれば、そのうちのいくつかを省くものもある。Part 4 では、Signed English を英語にほぼ完全に対応させるための 14 種類のサイン・マーカー(Bornstein & Saulnier 1984: xii-xiii)と「英語習得のためには、学習者が 14 のサイン・マーカーに継続して触れられるよう、周りで積極的にそれらを使っていくことが大切だ」という Bornstein & Saulnier の言葉も紹介している。

本研究では、開発・制作した上記の補助教材を用いてアメリカ手話のクラスルーム・イングリッシュを使った授業の試行を行った。さらに、動画は You Tube にアップロードして Zoom を用いた授業で学生に視聴させている(<https://youtu.be/ari7fb1bFp8>)。今後は、広く全国で活用し

てもらう予定である。また、今回は基礎的な内容を中心としたが、今後は発展的な内容に広げていきたい。

<引用文献>

- Bornstein, H. & Saulnier, K. L. (1984). *Signed English: A basic Guide*. New York, NY: Random House.
- Flodin, M. (2007). *Signing Everyday Phrases, Revised Edition*. New York, NY: A Pedigree Book, Penguin Group.
- Lawrence, E. D. (1999). *Sign Language Made Simple, 2nd Ed.* Springfield, MO: Gospel Publishing House.
- 上原景子・金澤貴之・レイモンド B. フーゲンブーム・中野聡子・山田敏幸 (2017)『英語教育における聴覚障害児の学習促進支援 - 合理的配慮に向けて - H23~27年度 科学研究費助成基盤研究(B)課題番号:23330274 の成果から』科学研究費助成 基盤研究 (B) 研究成果の一部のまとめ
- 上原景子, 浦田留衣, 大杉豊, 金澤貴之 (2018) 「聴覚障害学生の英語支援とアメリカ手話に関する一考察」群馬大学教育学部紀要 人文社会科学編, 第 67 巻, pp.95-105
- 浦田留衣, 上原景子, 山本綾乃, 金澤貴之, 大杉豊 (2019) 「聴覚障害学生の英語支援: 日本語, 日本手話, 英語, アメリカ手話の言語学的観点から」群馬大学教育学部紀要 人文社会科学編, 第 68 巻, pp.79-95

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 金澤 貴之	4. 巻
2. 論文標題 多言語・多文化共生の観点からのインクルーシブ教育	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 障害児教育実践の研究	6. 最初と最後の頁 pp.67-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野聡子・楠敬太・諏訪絵里子・吉田裕子・浅野雅子・望月直人	4. 巻 5
2. 論文標題 聴覚障がい学生のためのパソコンノートテイクにおける情報保障評価シートの試作と活用	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大阪大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 pp.9-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大倉孝明・中野聡子・金澤貴之	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 情報補完字幕システムの開発と評価	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育システム情報学会誌	6. 最初と最後の頁 pp.66-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金澤貴之	4. 巻 第29号
2. 論文標題 多言語・多文化共生の観点からのインクルーシブ教育	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 障害児教育実践の研究	6. 最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浦田留衣, 上原景子, 山本綾乃, 金澤貴之, 大杉豊	4. 巻 第68巻
2. 論文標題 聴覚障害学生の英語支援: 日本語、日本手話、英語、アメリカ手話の言語学的観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 群馬大学教育学部紀要 人文社会科学編	6. 最初と最後の頁 pp.79-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 上原景子, 浦田留衣, 大杉豊, 金澤貴之	4. 巻 第67巻
2. 論文標題 聴覚障害学生の英語学習支援とアメリカ手話に関する一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 pp.95-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://hdl.handle.net/10087/11767">http://hdl.handle.net/10087/11767</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計6件(うち招待講演 5件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 上原 景子
2. 発表標題 新しい英語教育の方向性と高校英語
3. 学会等名 令和1年度 群馬県高等学校長協会 教育課程委員会・教育課題委員会研修会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上原 景子
2. 発表標題 新しい英語教育における小・中言語活動のつながり
3. 学会等名 令和1年度 第1回茨城県笠間市 英語教育推進連絡協議会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上原 景子
2. 発表標題 英語で授業を行う意義：第二言語習得と小・中・高一貫の観点から
3. 学会等名 平成29年度 山梨県中学校英語教育研究会 春季研修会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上原 景子
2. 発表標題 次期学習指導要領と小学校英語教育
3. 学会等名 平成29年度 茨城県日立市小学校外国語教育研修会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 上原 景子
2. 発表標題 「英語教育改革」における小・中・高の連携を通じた授業と活動の充実に向けて
3. 学会等名 平成28年度茨城県笠間市英語教育連絡協議会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 YAMADA Toshiyuki
2. 発表標題 (Most) frequently observed grammatical errors of Japanese EFL learners even after the six years of English learning
3. 学会等名 MAPLLxTCPxTLxTaLK (MT3) 2018
4. 発表年 2018年



〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

制作した補助教材『アメリカ手話で学ぶ「クラスルーム・イングリッシュ」の基礎は以下のサイトにアップロードしている。  
<https://youtu.be/ari7fb1bFp8>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中野 聡子 (NAKANO SATOKO) (20359665)	群馬大学・教育学部・准教授  (12301)	
研究分担者	金澤 貴之 (KANAZAWA TAKAYUKI) (50323324)	群馬大学・教育学部・教授  (12301)	
研究分担者	大杉 豊 (OSUGI YUTAKA) (60451704)	筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・教授  (12103)	
研究分担者	HOOGENBOOM RAY (HOOGENBOOM RAYMOND) (80436295)	群馬大学・大学教育・学生支援機構・准教授  (12301)	
研究分担者	山田 敏幸 (YAMADA TOSHIYUKI) (50756103)	群馬大学・教育学部・講師  (12301)	